

第3回 日文研フォーラム

■
大相撲の近代化

The Modernization of Sumo

■
リー・A・トンプソン

Lee A. Thompson

国際日本文化研究センター

・ テーマ ・

大相撲の近代化

The Modernization of Sumo

・ 発表者 ・

リー・A・トンプソン

Lee A. Thompson



発表者紹介

リー・A・トンプソン氏

Lee A. Thompson

1953. 5. 27生

現職 大阪大学人間科学部 助手

アメリカ、ルイス・アンドクラークカレッジを
1981年に卒業後、日本に留学、1984年に大阪大
学大学院人間科学研究科前期課程社会学専攻を
修了、引続き同研究科後期課程に在学して、19
87年5月から現職。

専攻はスポーツ社会学で、「日本の戦後社会と
力道山」というテーマで論文を発表している。

日文研フォーラムもそろそろ京都の行事として定着してきた。これは、国際日本文化研究センターが、海外の日本文化研究者にそれぞれ自分がいちばん関心の深い問題を選んでいただき、それを報告していただいて討論をする会である。形式は全く自由で、アカデミックな研究報告の形から、体験談みたいな自由なトークという形までいろいろある。

既にこのフォーラムは七回を数えた。内容も形式も様々であったが、そこにはしばしば日本の研究者を驚かすような新しい視野が含まれていた。もう海外の日本研究は量・質ともに進歩して、これからの日本研究は海外の学説の動きを考えなければ、とうてい十分に出来ない状況になってきている。

このトンプソンさんの発表を私は聞くことができなかつたが、本文を読むと大変興味深い。日本ではふつう学問にならないことがみごとに学問になっている。実は、このトンプソンさんのフォーラムはテーマからいっても大変人気があり、フォーラムの参加者が一気に二倍になり、あとはその二倍になった参加者が定着した。良き発表をしていたこととともに、日文研フォーラムの聴衆を二倍にしていたいただいたことをトンプソンさんに深く感謝したい。

はじめに

まずこの機会を与えて下さった国際日本文化研究センターに感謝します。

今日は相撲について話させていただきたいと思えます。話を聞きますと、相撲に興味を持つ海外の研究者は少くありません。しかしこれまで相撲の研究をした人はいませんでした。それは多分、先にやらなければならぬ課題、例えば日本の社会構造、政治、文学、宗教、経済などについての研究が先にあって、相撲の研究はできなかったのでしょう。ですから私のような人間が相撲に取り組むということは、日本研究の成長ぶりを表している現象であるかもしれないかもしれません。と同時に、学問そのものも、一昔前まではスポーツのようなものをあまり対象にしなかったところがありました。今ではそういうことがなくなりつつあります。今ではスポーツは様々な専門分野において研究されています。その一つが社会学です。スポーツ社会学、あるいはスポーツの社会史と言ったほうがいいかもしれません。その命題の一つにスポーツの近代化理論というものがあります。それによりますと、近代スポーツは近代以前のスポーツと変わってきたと言われます。そしてその変化が産業化と深い関係を持っていると言われます。

具体的にどういうふうに変わったかと言いますと、例えば、スポーツ研究家の

Allen Guttmanは、近代スポーツの七つの特徴をあげています。^{*} その七つの特徴とは、世俗化、平等化、役割の専門化、合理化、官僚制的組織化、数量化、記録の追及、です。

*"From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports", Guttman, A.
New York: Columbia University Press, 1978. / 清水哲男訳「スポーツと現代アメリカ」TBSブリタニカ刊、一九八一年。

ところでこれらの特徴は、欧米のスポーツの分析から導きだされたものです。この命題が普遍的であるためには、欧米以外の社会で発達したスポーツを取り上げる必要があると言われています。そのため、欧米以外の国で産業化に一番乗りした日本で発達したスポーツを取り上げることが、有意義となってくるのです。日本には様々な在来スポーツがありました。その多くは消えたり、保存会によってかろうじて保存されたりしているのが現状です。現在まで生き残っているスポーツには、柔道や剣道、相撲などがありますが、私は最も古い形を残しているようにみえる相撲のことを調べれば、おもしろい結果が期待できるのではないかと

と違って、今の研究を始めました。

「相撲の近代化について調べている」と人に話しますと、「え、相撲のどこが近代化されているのですか」という人によく出合います。皆さんの中にも、そういう反応を持たれる方々がいらっしゃるのではないのでしょうか。

そこで、相撲の近代化について、これからお話したいと思いますが、ここでお断りしておきたいことは、私は決して先にあげた七つの特徴を尺度にして相撲の近代化度を計るつもりはありません。そうではなくて、それぞれの特徴が、はたして相撲の内に見出されるかどうか、という観点からだけ見たいと思います。時間の都合で的をしぼって、世俗化、合理化、数量化、記録、といった四つの特徴についてだけ話したいと思います。

世俗化について

Guttmannが一番にあげている特徴は世俗化です。近代以前のスポーツは何らかの形で宗教と絡み合っていたのです。古代オリンピックもそうでしたし、中世のスポーツのような行動も宗教的な祭りと関係を持っていました。スポーツが近代化するその第一歩は宗教から離れることでした。そのことをスポーツの世俗化と

言います。

ところで相撲の場合は、皆さんもお気付きだと思いますが、さまざまな儀式や儀礼があり、独特の神事的なスタイルがあり、ちっとも世俗化されていないように見えます。相撲が近代化されていないと思われているのは、その宗教的なスタイルのせいではないでしょうか。しかし世俗化以外の面では、相撲はかなり近代化されてきたといえると思います。ただ近代スポーツになれきっている我々、特に最近三十年の相撲しか知らない人にとっては、相撲の近代性は見過ぎしやすいかも知れません。ここで私はまず、他の項目における相撲の近代化について述べてから、もう一度、世俗化について検討したいと思えます。

合理化について

まず合理化のことです。広い意味での合理化と言いますと、世俗化など近代スポーツのすべての特徴を合理化という概念でひっくりめることができましようが、ここで問題にしたいのは、設備や道具の標準化と、ルールの普遍化と明文化ということです。

相撲の設備の一つに土俵があります。土俵の発明はだいたい十七世紀と考えら

れています。平安時代に毎年の七月に宮中で行われた節会相撲においては、土俵はありませんでした。鎌倉時代においては、相撲は武術として武士によって行われていました。当時の相撲は、柔術、後の柔道とはまだ分化されておらず、土俵はまだありませんでした。室町の末期から江戸時代に入りますと、勧進相撲という形で相撲が行われるようになりました。勧進相撲というのは、結局、木戸銭、要するに見物料を集めることを目的として行われた相撲のことです。当初は、神社やお寺の建立や修繕の寄附を集めるために行われていたと思われませんが、それを専門とする集団ができてくると、その人々の生活のために行われるようになりました。この時代は浪人が多く、彼らは生活に困っていましたが、その一部が相撲職業集団を作ったのです。

この時代にも土俵はなく、人々は相撲を取っている二人の周りに輪を作って観戦しましたが、その輪のことを人方屋と言いました。この人方屋には、明確な境界線がありませんでしたので、格闘者は見物人の中に突進したり、ぶつかったりすることが多くありました。見物人の中には自分の出番を待っている者もいたでしょうし、飛び入りで参加する者もありました。要するに、競技者と見物人との間に明白な分離がなかったのです。血の気の多い時代でもありましたので、彼ら

が興業する相撲にはもめごとや喧嘩がつきものでした。そしてついに、一六四八年に幕府から相撲禁止令が出されました。そこで相撲職業集団が考案したのは、見物人と競技者を分離することでした。

四本の柱を建て、そこに一本の紐を張って、現在のボクシングなどのリングのようなものの中で相撲を取っている絵が残っています。それは寛文年間（一六六〇年代）のもので、今の土俵の前身のようなものは、俵を地上にならべて、囲いを作るやり方でした。こういうやり方は十七世紀の後半の絵に見られます。やがて俵を小さくして土に埋めるようになったのが、現在の土俵の形式です。

こういうふうな土俵が出来上がったからでも、最初のうちはその大きさも形もまちまちでした。ですから四角い土俵もありました。本によりますと、明治の終りまで東北部の盛岡では四角い土俵で相撲を取っていました。しかし江戸では標準化が進み、やがて十三尺の二重土俵に標準化されました。そして昭和六年（一九三一）に十五尺の一重土俵に改められました。

現在の土俵には仕切線がひかれています。この仕切線は昭和三年（一九二八）に初めて設けられました。仕切線が設けられた時から、仕切に制限時間が設けられました。これはラジオによる相撲中継の開始に合わせて設けられた制度です。

最初の制限時間は幕内では十分、十両では七分、幕下では五分でした。制限時間ができる前には、力士によっては長い仕切があり、明治時代の両国梶之助は仕切が長いことで有名で、七十八回も仕切ったことがあると言われています。

ちょっと余談ですけど、仕切時間を制限することによって、相撲の見物の経験は大変変わったのではないかと思えます。というのは、仕切時間の制限がなかった時は、いつ立つかわからなかったわけですから、観客はいま立つか、いま立つかと息を飲んで仕切を見守らなければなりません。ですから、それぞれの仕切に緊張感があったと想像されますが、現在では、たいてい時間が来たとき以外では立ちませんから、その時だけ見ればいいし、その時さえ見れば勝負が見られるという安心感もあります。制限時間は昭和十七年と二十年にさらに短縮され、昭和二十五年（一九五〇）に現在のよう幕内四分、十両三分、幕下二分になりました。制限時間の話になってしまいました。これは相撲のルールにかかわることです。

ルールの明文化について

近代スポーツには普遍的で明文化されたルールがあります。相撲のルールは長

い間、明文化されていませんでした。相撲のルールの明文化の切掛けは、昭和二十八年（一九五三）の五月場所の五日目に、朝潮、現在の高砂親方が相手のマゲをつかんで投げたことにあります。次の日から東西の支度部屋に、髪をつかむことを含む五つの禁じ手が張り出されました。そして昭和三十年に協会は「昭和三十年度公認相撲規則」を出しました。これによって相撲のルールは初めて明文化されました。

三十一年秋場所の十日目に若羽黒は、自分の手が相手の髪に絡んだまま、相手を引き落としました。軍配は若羽黒に上がりましたが、物言いがつき、協議の結果、若羽黒の反則負けになりました。現在の禁じ手は八項目あります。・握りこぶしでたたくこと・目やみぞおちなどの急所を突くこと・ノドをつかむこと・胸や腹をけること、などの禁じ手が明文化されています。

数量化について

記録と並んで近代スポーツを最も特徴付けるものは数量化でしょう。それは近代的スポーツの一つと考えられる野球のことを思い出していただけたらずぐにわかるように、打率、防御率などといった統計的な数量によって、選手の業績を評

価します。リーグ優勝は勝率によって決まります。

相撲においても、力士の業績を評価するのに数字や統計がよく用いられます。三年前に「明治大正昭和全幕内力士名鑑」という本ができましたが、その中に、各力士の幕内成績と勝率がのっています。

横綱を評価するには在位勝率があります。千代の富士がどんなに強い横綱なのかを示すのに、横綱在位勝率をあげることができます。昭和三十三年の六場所制以降の横綱で、勝率八割を越えたのは四人しかいません。千代の富士はその一人で、その在位勝率は約八割四分なのです。

相撲の取り方、つまり取り口自体を数量化することもできます。今年の初場所の途中に出た新聞記事によりますと、北勝海は前半戦、四つ身になる相撲が多く見られたそうです。そしてこれは北勝海本来の相撲ではなく、北勝海本来の相撲は押し相撲だ、と記事は言っていました。そのことを裏付けるために、昨年末まで北勝海は二五三勝をあげているが、そのうち投げ技は十七番に過ぎない、押し出しが八十五番もあると書いています。数字をあげて、北勝海本来の相撲が押し相撲だ、ということを証明しています。また、初場所は四横綱ということで注目されていましたが、過去における四横綱の豪華番付の実績を統計を挙げて論評す

る記事がありました。それによりますと、今回は史上十三回目の四横綱番付で、戦後では九回目。横綱が地位として番付に明記された明治二十三年以来の全場所の五分の一、六十一場所が四横綱番付の場所でした。ところで四横綱がそろって全勤したのは、そのうちの十場所しかありません。そしてその六十一場所のうち、横綱が優勝したのは四十一回だけです、つまり横綱勝率は六割七分二厘で、四横綱の豪華番付における横綱は、意外に脆いと数字を挙げて論評しています。そしてその予測が見事に当たりました。

数字や統計による評価の例をいくつか見てきましたが、来月はいよいよ年に一回の大阪場所です。新聞などの数量的な報道に注目すれば、面白いのではないかと思います。

ところでこういうふうな数字によって力士の実績を評価するのは、いつぐらいからでしょうか。まず雑誌の場合を見てみましょう。明治三十年と三十一年に「角力新報」という雑誌が発行されました。相撲博物館に九号まで保管されていますが、それを見ますと、当時の力士の紹介と評価が何回も出ています。数字による評価というものはほとんど見当たりません。成績のみならず、身長、体重でさえ、ほとんど見当たりません。そんな中でただ一つの例外があります。そ

れは第八号で、当時の平幕だった常陸山と梅ヶ谷の体格を、身長、体重、握力、胸囲などというふうにならぬに九項目にわたって数字を挙げて比較している記事です。明治三十一年に、こういう例を初めて見られます。

つぎに明治四十五年から「角力世界」という雑誌が発行されました。これも相撲博物館に保管されていますが、その三十六号までを調べてみました。やはり数字による評価はなかなか見当たりません。数カ所で終わったばかりの場所の成績に触れている程度です。現在のように統計を用いて力士を評価する試みは、大正四年二月の三十五号になって初めて見出されます。

その記事は、鳳という大関の横綱昇進を主張するものです。記事によりますと、鳳の横綱に反対する人が彼には実績がない、と言うのに対して、記事を書いた記者は、いや、実績がある、と証明するために、鳳の前五場所の成績と、明治時代の横綱の小錦の横綱になる前五場所のそれとを比較するのです。鳳は三十七勝四敗二引き分け、六休だったのに対して、小錦が二十勝四敗、六休で、引き分けや休みを対象外にして、勝負がついた取り組みの負率を割り出すと、鳳の負率は一割強、小錦の負率は二割ということになり、鳳の負率は小錦のそれより低いと言つて、記者はこう結んでいます。「かく星数の上から見て、鳳は故人小錦に勝る

こと多く、横綱として決して不足はない。」これは、二つの雑誌を通じて最初に現れた統計による実績の評価です。

今度は新聞を見てみましょう。多くのファンは毎日競技場まで足を運ぶわけにはいきませんので、新聞などのマスコミを通じて相撲を追っているわけです。新聞には数字や統計によって場所の進行を報道します。まず、場所中、毎日星取表が載っています。星取表を見れば、場所のその日までの成り行きは一目でわかります。すべての幕内力士の一日目からの成績が記されています。私たちはそれを見て、今だれがリードをしているかがわかります。

では星取表はいつから新聞に載るようになったのでしょうか。私が調べたかぎりでは、最初に星取表が出たのは、明治十七年（一八八四）でした。しかしこれは千秋楽だけの星取表です。場所終了後のまとめとしては役に立ちますが、場所の途中で、だれがリードしているのかを知りたい人にはもの足りません。場所の途中から星取表が出たのは、明治三十三年でした。五月場所の七日目です。これで初めて、新聞を見れば、その日までの各力士の成績がわかるようになりました。もう一つ新聞に載っているのは、今日の取り組みです。今日の取り組み欄に各取り組みの過去の対戦成績が載っています。幕内での今までの対戦成績が載って

いますし、過去一年間（六場所）の対戦成績も載っています。過去の対戦成績は今日の各取り組みにおいてどちらが有利かを予想するのに参考になります。今年の初場所の十日目、全勝の旭富士は一敗の小錦と対戦しました。対戦成績は小錦の九勝五敗と、小錦が有利でしたが、最近の一年間の成績を見ると、三勝三敗の五分、しかも旭富士の三勝は前三場所の連勝です。この数字をあげて、旭富士に勢いがついている、と新聞は書きました。そしてその通り、旭富士が勝って全勝を守りました。すると次には、対戦成績において分の悪い双羽黒の廃業と大乃国の休場によって、旭富士は初優勝に大きく前進した、と新聞は書きました。そして実際に旭富士は優勝しました。

こうして対戦成績は、今日の取り組みの勝敗の推測だけではなく、優勝候補を検討するのにも用いられます。配った資料の中に、「五強の予想対戦相手」という欄がありますが、これは優勝の可能性が残っている五人の残り四日間の予想対戦相手と、それぞれの過去の対戦成績を載せたものです。こうした数字は、これからの場所の展開を読むための資料になるのです。

勝負を予想するには対戦成績以外の統計も用いられます。去年九州場所の七日目に全勝同士の千代の富士と北天佑が対戦しました。新聞によると、対戦成績は

千代の富士の二十一勝十二敗でしたが、ここで持ち出されたのは今場所の平均対戦時間です。北天佑は六番で四十八秒、平均して六秒で相手を料理しています。

一方、千代の富士の方は、一番平均十九秒も費やしています。この差を北天佑の「勢い」として、北天佑有利という予想を載せています。

さらに対戦成績によって、番付においての位を評価することもあります。去年の三月の大阪場所は、小錦が大関を狙う場所でした。場所前に出た記事では、その前三場所における二横綱と五大関に対する対戦成績を載せています。その成績は小錦の十三勝五敗でした。そしてその三場所において、小錦は合計三十二勝をあげており、五人の大関のだれをも越える成績である、と指摘されています。そして記事は、「これで、大関の力があることがわろう」と結んでいました。

このように対戦成績は、現在重要な役割を果たしていますが、新聞に載るようになったのは、比較的最近のことなのです。「今日の取り組み」欄に対戦相手との過去の成績が新聞に載るようになったのは昭和三十年からで、約三十年前からのことなのです。

数量化と密接な関係にあるのが記録です。記録は一番いい成績を数字で表わして残します。記録は時間と空間を超越しています。ふたりの選手は、同じ場所にいなくても、同じ時代に活躍しなくても、記録によって競争することができます。そして記録は常に塗り替えられる可能性、その運命をもっていますので、記録は進歩という近代社会の中心的な思想を含んでいます。

相撲にも様々な記録があります。通算出場、通算連続出場、通算勝ち星数、通算負け星数、金星獲得回数、三役昇進回数、対戦した横綱の人数、年間最多勝、などの記録があります。

そして記録を意識して、記録を更新しようという意欲も相撲界にあります。去年の夏場所まで、九重部屋の力士、つまり千代の富士と北勝海が十場所連続優勝していました。これは大正年間の出羽の海部屋の十連覇という、同一部屋による連覇記録とタイ記録になっていました。新聞によると、九重親方は次のように語っています。「今はタイ記録だけど、これじゃだめ。ここまで来たらなにがなんでも抜いて新記録を作らないと。十一連覇なんて記録は、もう当分破れない。更新されても恐らく一〇〇年後だ。それまで九重の名前がサン然と君臨するんだから燃えるのは当り前じゃないか。」このように優勝の新記録を作ることに執念を

燃やしているわけです。

このように相撲においては、優勝ということが関心の中心にあります。星取表によって、優勝レースにだれがリードをしているかを見ますし、優勝候補がある程度しぼられてきますと、対戦成績によって優勝の行方を予想して楽しみです。

では、優勝制度はいつごろからあるのでしょうか。この制度の成立は意外に遅く、明治四十二年（一九〇九）に初めて優勝制度ができたのです。それ以前の人々は相撲に何を見ていたのか、優勝制度がすっかり定着している現在では、それがないと何かもの足りないような気がしますが、八十年前まではそういう相撲だったのです。明治四十二年の当時は東西優勝制度でした。それは力士を東と西に分けて、勝ち星の多いほうを優勝側と決め、優勝旗を渡すものでした。

ところでその時から、時事新報社という新聞社から最高成績者——今という個人優勝者——へ優勝額が進呈され、掲げられるようになりました。そして大正十五年になって初めて、協会は最高優勝制度を設立し、個人優勝者に天皇賜杯を授けるようになったのです。

二つの優勝制度のもとで、個人優勝者は必ずしももてはやされたわけではありませんでした。というのは、個人優勝者とは別に旗手というのもいたからです。

旗手は、東西対抗で西が優勝したとすれば、西側の力士の中から大関や横綱を除いた最高の成績を残した幕内力士がなったわけです。三役以外の平幕力士という記述もありますが、旗手と個人優勝者は必ずしも一致するわけではなかったのです。どちらかというと、同一人物ではない場合の方が多かったのです。お判りのように、上位の力士が優勝することが多いですから、その場合、旗手は平幕で別の人になるわけです。また、個人優勝者は東西対抗で負けた側の力士になることもしばしばでした。そしてこの旗手が新聞紙上でも割ともてはやされた時代がありました。個人優勝者の記述のない時もありました。

東西対抗制度が廃止され、個人優勝制度一本という現在のようになりましたのは、昭和二十二年（一九四七）のことです。

優勝制度ができた時から、一つの改革が行われました。優勝制度ができる前には、預かり、引き分け、休みの星がありました。預かりは、物言いがつき、どちらにも決着がつかない時に付けられるもので、現在では取り直しとなるところです。引き分けは、相撲が長引いて決着がつかない場合に付けられるもので、現在では水を入れてから取り続けさせます。そして当時は、休んでも負にはなりませんでしたので、黒星を防ぐために、休みを悪用することができました。

優勝制度ができると、勝敗をもっと引き締める必要が生じてきました。特に、個人優勝の場合、預かり、引き分け、休みが入りますと、一番いい成績はだれか判断しにくい場合が出てきますので、大正十五年から、預かり、引き分けが廃止されました。預かりはそのすぐ後に取り直すことになり、引き分けも二番後に取り直すことになりました。しかし廃止したものの、場合によっては生きていたように、先代若の花、現在の二子山理事長の生涯成績には、四つの引き分けが残っています。

昭和三年から「休み」が廃止され、休んだら相手の不戦勝になるようになりました。これによって白星と黒星しか残らなく、勝敗がはっきりしました。

ところで優勝を決めるのに、もう一つ問題になったのは、同成績の場合はどうするかという問題でした。というのは、場所は勝ち抜き戦ではありませんから、同成績の者が最後に残るということは珍しくありません。当初、同成績の場合は番付の地位が高い力士の方を優勝者にしたのですが、それではファンが納得しないところがありまして、昭和二十二年から、同成績の場合は優勝決定戦を行うことになりました。

個人優勝のあり方でもう一つ問題になったのは、対戦相手の組合せの問題でし

た。東西対抗制度においては、同じ側の力士同士は対戦しないというやり方でしたが、昭和二十二年にそれが廃止されても、系統別総当りは残りました。御存じでしょうが、相撲部屋には一門という系統があり、東西制が廃止されてからでも、同じ一門同士の力士を対戦させませんでした。系統別を廃止し、部屋別総当りが実施されるようになりましたのは、昭和四十年（一九六五）からのことです。この制度のおかげで、九重部屋の北勝海は同じ部屋の千代の富士と対戦しないで横綱になることができましたが、それでも以前より多彩な取り組みが見られるようになったことには違いはありません。

再び世俗化について

世俗化のことを一番最後にとっておきましたが、相撲はあまり世俗化されているようには見えません。歴史家の和歌森太郎氏は、「相撲には信仰に絡んだ神事的性格が付きまとい、さらに「今の相撲場や力士のスタイルも、その作法にも、神事から由来するものを多くとどめ残している」と言っておられます。私はこの「とどめ残している」という言い方に注目したいと思えます。相撲の儀礼のスタイルは古くからのもので、「今に残っている、継続している」と

というのが一般的な認識ではないかと思いますが、はたしてそうなのでしょうか。

*『相撲今むかし』和歌森太郎著、河出書房新社刊、一九六三年。

まず屋根のことは見てみましょう。今の屋根は神明造りです。神明造りは伊勢神宮のものがその代表で、神社の本殿の屋根の形式です。ところで相撲場にこういう屋根が使われるようになったのは、やっと昭和六年（一九三一）からのことです。それまでの屋根は入り母屋造りでした。入り母屋造りは農家に最も多く見られる屋根の形です。昭和六年に農家の屋根から神社のそれに変わったのです。

つぎに行司の服装のことですが、行司はレフェリーを勤めると同時に、土俵祭りのように、神主の役も勤めます。この行司の服装は、現在では素襦と烏帽子なので、なんとなく神主らしく見えますが、こういうかっこうをするようになったのは、明治四十二年からです。それまでは袴を付けて土俵に上がりました。

力士の服装についても、国技館ができるまでは、力士はどちらかというと博徒や男伊達と一緒のように見做されていたそうでした。着流しスタイルで町を歩き回りました。国技館ができてから、袴と羽織を着て場所入りすることが義務づけ

られたのです。そのときから大銀杏マゲを結うようになりました。

これらは全部、明治に入ってからのことですから、どちらかというところ、相撲のスタイルの変遷には逆世俗化の傾向が見られるのではないかと思えます。宗教的な性格が薄れていくのではなく、逆に濃くなってくるわけです。

それでは他の神事的な要素はどうでしょうか。

まず土俵入りから見えます。土俵入りが錦絵に初めて登場するのは、享保年間（一七一六～一七三六）とされています。本来の土俵入りは、大勢の力士が土俵の上で輪を作ってシコを踏んだものですが、やがて力士の数が増えて、土俵の上が窮屈になりましたので、明治の半ば頃から今のようになくなりました。

横綱土俵入りの原形は一人土俵入りです。横綱自体は寛政年間（一七九〇年代）に谷風と小野川がなったのが初めてで、彼らに一人土俵入りが許されました。これは今日の横綱土俵入りの原形のようなものでした。その後の横綱はそれぞれらばらの形で土俵入りを行なっていましたが、現在の雲竜型と不知火型に固まったのは幕末（一八六〇年代）でした。

つぎに土俵祭りや弓取り式の由来ですが、寛政三年（一七九一）に十一代将軍徳川家成の前で初めての将軍上覧相撲が行なわれましたが、これを成功させたの

は行司の吉田追風でした。これによって相撲の地位を上げることができました。その地位に相応しく、吉田追風は横綱、横綱による一人土俵入り、土俵入りなどの制度を作ったというふうに言われています。弓取り式もこの時から行われるようになりました。最初は千秋楽だけで、毎日行われるようになったのは、昭和二十七年（一九五二）からです。

最後に、塩をまいたり力水を付けたりする事の始まりですが、これらは元禄年間（一六八八〜一七〇四）からと言われています。

これまで述べてきたことから言えることは、まず第一に、現在の相撲の形式は、神事相撲を直接に受け継いだものではないということです。神事的性格があまり強くない勸進相撲がまずあって、後から現在見られるような宗教的要素を次々と取り入れてきたと言えると思います。

ただし、両者がどこから来たかという問題は残ります。現在全国の至る所で神事相撲が行われていることから推測して、神事相撲を真似したということも考えられそうですが、もしそうだったら、神事相撲は勸進相撲より先に行われていなければなりません。しかしそれらがいつから行われているのかなかなかわかりませんし、現在あるからといって、太古からあったとは限りません。

ここで二つだけ例をあげてみましょう。一つは埼玉県荒川村上田野字船川にある千手観音堂で毎年八月十六日に行われる信願相撲というのがあります。その由来は、明和年間（一七六四—一七七二）に、その出身の力士が、江戸相撲で強くなるように千手観音に願をかけてそのとおり強くなったので、国に戻って観音堂の境内に土俵を設けて、そこで出世披露相撲を行ったのが始まりだ、というふうに伝えられています。出世披露相撲が信願相撲の原形と伝えられているわけですが、これは明らかに勧進相撲が神事相撲の原形になった例と言えます。

*『船川の信願相撲』埼玉県民族芸能調査報告書第三集、埼玉県立民俗文化センター刊、一九八四年。

もう一つは大原野神社で八月十日の御田刈り祭りの際に行われている大原野相撲の例です。これは享保二年（一七一七）から行われていると、神社のしおりにあります。要するに、勧進相撲が軌道に乗ってから始まったわけです。

従来考えられて来たように勧進相撲が神事相撲の影響を一方的に受けたという見方は、考え直す必要があるのではないかと思えます。逆に、勧進相撲の方は神

事相撲の普及に貢献したということはありうるのです。それだけではなく、神事相撲の形式にも、影響を与えていると考えられます。現に、神事相撲においては丸い土俵が広く使われていますが、見てきたように、丸い土俵は江戸時代に入ってから設けられたものですので、少くとも、それは勧進相撲の影響と考えられるでしょう。

まだ調べは行き届いていませんので、問題点は多いと思いますが、もしこういう解釈が正しければ、それではなぜ勧進相撲は宗教的な要素を装ったのか、という問題がここに浮かび上がってきます。時間もありませんので私の結論を簡単に言いますと、人気を得るためとか、興業化の許可を得るためとか、当時の権力者の庇護なり支援をこうむるために、それぞれの時代によって取られた道であった、と言えるでしょう。

ご静聴、ありがとうございました。

参 考 文 献

- 『大相撲を見るための本』出羽海智敬・向坂松彦著、同文書院刊、一九八五年
- 『相撲の歴史』池田雅雄著、平凡社刊、一九七七年
- 『力士漂泊 相撲のアルケオロジ』宮本徳蔵著、小沢書店刊、一九八五年
- 『近世日本相撲史』全5巻、日本相撲協会博物館運営委員監修、ベースボール・マガジン社刊、一九七五〜八一年
- 『大相撲の事典』高橋義孝監修、三省堂刊、一九八五年

***** 発表を終えて *****

普段考えていることや研究していることを、多彩な聴衆の前で発表できたことは、私にとってたいへんよかったと思います。と申しますのも、学会や研究会とは違ったさまざまなコメントや質問をいただくことができ、いろいろと考えさせられたからです。

また、日文研の皆さんを含め、内外からの出席者との交流も、貴重でかつ楽しいものでした。これからもフォーラムで始まったお付き合いを大切にしていきたいと思います。

トニフヨン

日 文 研 フ ォ ー ラ ム 開 催 一 覧

回	年 月 日	発 表 者 ・ テ ー マ
1	62.10.12	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
3	63.2.19	リー・A・トンプソン（大阪大学助手） 「大相撲の近代化」
4	63.4.19	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） 「庭園に見る東西文明のちがい」
5	63.6.14	宋 彙七（慶北大学校師範大学副教授） 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63.8.9	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） 「近世後期日本の遊び一拳を中心に」
7	63.10.11	スーザン・ネイピア（テキサス大学オースティン校助教授） 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」

非売品

発行日 1988年11月30日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区大原野東境谷町2-5-9

電話(075)331-4101

問合先 国際日本文化研究センター

管理部・研究協力課

© 1988 国際日本文化研究センター

■ 日時

1988年2月19日(金)

午後3時～5時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

